

緊迫の24時間再現の記事を読んで

石動中学校 二年 大野 沙樹

「戦争なんて本当にあつたのか」
ときどきそう思うことがある。戦争を知らない私にとって、戦争は非現実的で、マンガやアニメの物語のように思つてしまう。しかし、終戦から七十年という節目を向えた今年、戦争の悲劇をもう一度よく理解し、現実として受けとめていきたい。

八月十五日、七十回目の終戦の日を向えた

その日、新聞は終戦一色だった。どんどん読み進めていくなかで、私はある記事で言葉を失つた。「緊迫の24時間 再現」。半藤一利さんに終戦の日を振り返ってもらい、最新の史料も加えて、あの日を再現したのもだつた。七十年前の八月十五日、あの日影には、軍の一部が反乱、陸相の自決があつたという。前日の十四日にポツダム宣言を受諾し、降伏することが決まり、十五日に入り天皇が床に就かれた後、皇后周辺は緊迫した夜を迎えて

いた。徹底抗戦を唱える一部の陸軍将校らに
よるクーデター未遂、後の「宮城事件」が起
こる。無事説得し鎮圧するも、陸相が自決。
玉音放送までの間、これだけの事件が起きて
いたことを初めて知った。今まで私が知って
いたことは、玉音放送をした、ということだ
け。驚いて何も言えなかった。震えが止まら
なかった。戦争を終わらせることはこんな
にも大変なことなのか。たくさんの人々の生活
笑顔。そして命を奪った戦争の重さを知った。

千藤さんはこう言っている。「始めるのはあ
る意味で安易だが、戦争を終わらせるとい
うことは真実大変なことなのである。これ以上
の困難はない大事業と聞いていい。戦争
を初めるのは簡単だ。どんなに小さな理由で
も、力があれば戦争はできる。しかし、戦争
を終わらせるには、それまでに奪った命、起
こした誤りを認めなければいけない。それは
辛いことだと思ふ。そのことを乗り延えられ
たからこそ。今の日本があると、私は思う。

あの日の影で起った出来事。私はあの日のほんの一部しか知らなかった。きっと、この事実を知っている人は少ないだろう。歴史のなかでは語られない現実。そう現実なのだ。フィクションではない。そのことで悩んだり、怒ったり、勇気を出した人々がいることを、たくさんの人に知ってもらいたい。

私は戦争の内容を知ることにはできるが、その時代に生きた人々の苦みを理解することはできない。しかし、知ろうしないのはいけないことだ。あの悲劇を二度とくり返さないために、日本国民、いや今生きている全員が「戦争」を受けとめ、未来へ伝えていくことが大切だ。それが、この世界に生きている私達の役割だと思う。